

佐々木照央(SASAKI Teruhiro)

世界語の孤児 CI の話(Pri “CI”, la orfo de Esperanto)

ありながら使われない。何かしら疎んぜられる。生まれそこない、あるいは死産といってもいい。まるで不可触賤民のごとき扱いを受けている。日本の放送禁止用語に近い。これがエスペラント語の CI。すべての教科書では VI を使うようにとすすめる。英語の YOU と同じように。YOU や VI には上下貴賤がない。身内と他人の差別もない。直接に面と向かって対峙する人との上下関係や親密度にまったく気配りする必要がない。その便利さが YOU と VI にある。上下関係の差別が厳格な土地ではその便利さがかえってありがたい。しかし、近親と他人との区別を大事にする土地では YOU と VI だけでは不自由である。

上下関係の厳しい韓国や日本では、VI にあたる国語のことばを適切に選択することさえ容易ではない。「あなた」とか「タンシン」など不用意に使うととんでもないことになる。礼儀を知らぬ無作法者として爪はじきにあうかもしれない。日本では、二人称の卑人称化が激しい。「貴様」、「お前」、「おぬし」、「君」などを見ても、使用の初期にはそれらが極上の尊敬語であったにちがいない。わが国には YOU や VI に相当する簡単な言葉はない、いやあり過ぎて困る、というのが正しい。伝統的な日本人は会議、宴会、交流会などに出ると無口になる。それは自他の距離をうかがうというかなり長い時間が必要であり、あっさり VI とか YOU で呼びかける習慣がないからであろうし、逆に外国語かぶれの人が YOU や VI のつもりで「あなた」を連発しようものなら顰蹙をかう。日本や韓国では「名前と肩書き」または「名前+さん」で VI を表現するのが無難かもしれない。

人間関係に配慮する煩雑な苦勞が要らないという意味で、韓国人や日本人には YOU と VI はまことに「優美」である。英語は各種の試験勉強で嫌悪感を植えつけられてきただろうから使いにくいだろうが、エスペラント語で VI の付き合いをすることは「平等社交会」への加入となり、上下から水平へ、生活環境が劇的に変化する。これは日本人や韓国人にとっては市民革命に等しい。

ところが、身内と他人とを二人称代名詞の使い分けによって区別したがる土地、特に欧州やロシアの人々にとって、VI しか使えないのは不自由きわまりない。ロシア語では **Вы** と **ты**、仏語では **vous** と **tu**、ドイツ語では **Sie** と **Du**、スペイン語では **Usted** と **tu**、その他この区別をもつ土地の人々にとっては、エスペラント語でも CI が忌避されないので望ましい。(現代中国語普通語では「ニン」と「ニー」であるが、これは事情が少し異なる。) これは日常生活のみならず、文学作品においても極めて重要な本質部分である。新宿駅の群集はどんなに多くの人間がいても見ず知らずの他人、しかしいとしい家族や恋人、無二の親友は CI で呼びたくなる。

僕はレニングラードバレエ団(今のマリインスキイ劇場)の古参連中とは若い時から **Ты(CI)**の仲だ。彼らとは僕が大学4年の時からのつきあいである。九州から上京して大学

に入りロシア語を勉強した。実は日本語の標準語会話も同時で、上京してからのことだ。ロシア語の会話で **Вы** から **Ты** に移行するときの嬉しさは格別だった。おかげで新しい友達関係ができた。日本人との間にはこんな関係は生まれにくかった。そんなわけで、逆に、亡命したバルシニコフと再会した時 **Вы(VI)** と呼ばれて深い傷を負った。なお夫婦や恋人の間で **Вы(VI)** を使うようになったら、その蜜月は終了、離婚寸前である。この **CI** の問題について、ロシア文学との関連で論じてみよう。

チェーホフ劇『ワーニャ叔父さん』の中で、老教授の娘ソーニャと老教授の再婚の妻エレナとの和解の場面がある。この場面では義理の娘と継母のよそよそしい **VI(Вы)** ではなく、向後は **CI(Ты)** でお互いに会話しようということになる。エスペラント語の訳では次のようにされている。

Jelena Andrejevna. Ankaŭ vino estas... Ni trinku je "ci".*

Sonjo. Trinku ni.

エレナ・アンドレエヴナ。ワインもあるわ… 私たち **CI** で呼び合って飲みましょう。
ソーニャ。 飲みましょう。

訳者はこの際にどうしても **CI** を使うしかしようがない状況に追い込まれる。他に適当な訳語が見つからないからである。そこで訳者は注を付けて次のように説明せざるをえない。
*Ruslingvela vorton "vi" oni uzas por alparolo, i.a, por demonstri tro oficialan kaj eĉ malamikan rilaton al alparolato en situacioj, kiam oni normale diras "ci". Mi diferencigis la uzadon de tiuj pronomoj nur kiam vere gravis priskribi la interrilatojn: unue, inter Jelena Andrejevna kaj Sonjo; due, inter Vojnickij kaj Serebrjakov. (*Rim. de la trad.*)

[Anton Pavloviĉ Ĉeĥov, Onklo Vanja. Ela la rusa tradukis Mikaelo Povorin. Moskvo, 2005, p.21]

「ロシア語で **VI** が使われる場合は、対話者への極公式的な関係、および普通は **CI** で語られる状況においては対話者への敵対的な関係を示すために用いられる。私とその代名詞の使用に差異をつける時、相互関係表示が真に重要な場合に限る。」(訳者注)

つまりロシア語では、**VI** はよそよそしい公式的なニュアンス、それもし **CI** で普通話し合っている仲では、敵対的な冷却した関係になったとき **VI** を用いるのである。

『ワーニャ叔父さん』では注付きで **CI** を本文に使用しているが、チェーホフの珠玉の短編『小犬を連れた貴婦人』では本文では **Ты** が重要な意味を持つときにも **VI** を使用する。

- Kial mi povus ĉesi vin* estimi? demandis Gurov. – Vi mem ne scias, kion vi diras.
[Anton Ĉeĥov, Ĉeriza ĝardeno, Rakontoj, noveloj kaj dramoj. Kaliningrado, Sezonoj, 2004, p.233. La Damo kun hundeto.]

「なんで僕がおまえを尊敬しないなんてことがある？おまえ自身何を言っているのかわかっちゃいない。」とグーロフは言った。

この場面は妻子あるグーロフと夫ある婦人アンナが深い仲になった直後、彼に身を許したアンナに対し **Вы** から **Ты** へと呼び方が変化したところである。かつては露骨な性描写など文学では書かれなかった。つまり、ロシア語で読む読者は男女関係の変化を人称代名詞の変化で理解するのである。エスペラント語訳で VI のままだとその変化がつかめない。そこで、訳者は星印をつけてから次のように注をつける。

Ĉi tie Gurov komencis cidiri al Anna. [l.c. p.349]

(ここでグーロフはアンナに CI で呼びかけ始めた。)

すなわち、こんな注が不可欠なほどここでの呼称の変化が重要な意味をもっているのである。ある英訳では YOU だけですまし、注もない。

“Why should I stop respecting you” asked Gurov. “You don’t know what you’re saying.”
[The Chekhov Omnibus: Selected Stories. Translated by Constance Garnet. London, 1995, p.520]

前回紹介した『エヴゲーニイ・オネーギン』のエスペラント語訳でも、この問題は解決されていない。タチヤーナからオネーギンへの恋文は、途中で突然 **Вы** から **Ты** に移行している。元はフランス語で書かれたとされているので **Vous** から **Tu** へと変化した、といってもいい。しかし、エスペラント語訳では VI で通している。

Alia!.. Sed sur tuta tero	Другой!.. Нет, никому на свете
neniu hom' egalus vin!	Не отдала бы сердца я!
Decidis la Supera sfero:	То в вышнем суждено свете...
mi estos via*, laŭ destin'.	То воля неба: я твоя;
Viv' mia estis garantio	Вся жизнь моя была залогом
de nia nepra rendevu';	Свиданья верного с тобой;
al mi vin* certe sendis Dio,	Я знаю, ты мне послан богом,

(Puŝkin Eŭgeno Onegin, tradukita de Valentin Malnikov, Letero de Tatjana al Onegin, p. 68; ПСС. 5, с.71.)

星印を私が付した部分が CI に移行している。タチヤーナのエヴゲーニイへの恋心がいかに異常に燃え上がったかを示す上でこの移行は決して些細なことでない。エヴゲーニイが何故タチヤーナをたしなめるような言動をしたのか、この移行もその理由の一つであろう。ナボコフの英語訳ではその変化を **thy** の使用で表現している。

Another!... No, to nobody on earth
would I have given my heart away!

That has been destined in a higher council,
that is the will of heaven: I am thine;
my entire life has been the gage
of a sure tryst with you;
I know, you're sent to me by God,

[Aleksandr Pushkin, Eugene Onegin. Translated by Vladimir Nabokov. vol.1, Princeton Univ. Press, 1975,p.166]

『ロリータ』で有名なナボコフはこの変化を軽視しなかったのであろう。ただし、変化の瞬間だけで、それ以後は YOU を使わざるをえない。

エスペラント語でギリシャ哲学を論じた作品では CI を多用した例がある。

- Platono eraras. Kiuj ajn estas la dioj, je kiuj ci kredas, ci kreas ilin laŭ ia modelo, kiun ci vidas aŭ kredas vidi en ci. Tiel ke cia konduto restas ido de cia kono pro ci mem aŭ cial eraroj pri ci mem.
- Ci konu cin mem, rediris Kritono ...

[Han Ryner, L veraj interparoladoj de Sokrato. SAT-Broŝurservo – Laŭte!, Beauville, 1999, p.155]

ー プラトンは間違っている。汝が信じる神がいづれであっても、汝は汝が己の中に見る、または見ると信じる、あるモデルにそってそれらを造る。従って、汝の行為は汝自身の認識の落し子ないしは汝自身についての汝の誤謬の落し子である。

ー 汝自身を知れ、ークリトンはまた言った。…

この場合の CI の多用はギリシャ哲学の原典の特徴かもしれない。原典の直訳からこの形式となったと思われる。

ザメンホフ自身はできるだけ CI の使用を避け、原文では Ты でしかありえない場合にも、CI は使わず、VI の方で処理している。例えば、『検察官』でフレスタコーフと従僕オシップの会話では、Ты で主人が話すにもかかわらず、ザメンホフは VI で通している。

Ĥlestakov. – Jen, prenu ĝin. (Fordonas la ĉapon kaj kanon.) Ha, vi denove ruliĝadis sur la lito?

Osip. – Kial do mi ruliĝadus? Ĉu mi neniam vidis liton, efektive?

Ĥlestakov. – Vi mensogas, vi ruliĝadis; vi vidas, ĝi tuta estas malordigita!

[N. V. Gogol, La Revizoro. tradukis L. L. Zamenhof. p.23]

最近の文法書でも CI の扱いは極めてそっけない。ほとんど死語に近い処理である。Wennergren 氏の文法書では次のようになっている。

Ci estas unu-nombra alparola pronomo (kiu tute ne montras sekson). *Ci* kaj *cia* ekzistas nur teorie, kaj estas preskaŭ neniam praktike uzataj. Eblus imagi *ci* kiel pure unu-nombran *vi*, aŭ kiel intiman familiaran (unu-nombran) *vi*, aŭ eĉ kiel insultan (ununombran) *vi*. Sed **estas fakte tute neeble diri, kian nuancon ĝi montras**, ĉar ĝi apenaŭ estas uzata:

- *Ci skribas (anstataŭ “ci” oni uzas ordinare “vi”).* Tio ĉi estas la sola frazo kun *ci* en la *Fundamenta Ekzercaro*. Krome *ci* kaj *cia* estas menciitaj en la *Universala Vortaro* de la *Fundamento*, sed en la *Fundamenta Gramatiko* (“la 16 reguloj”) aperas nek *ci* nek *cia*. Ankaŭ en la *Unua Libro* ili ne troviĝas.

Iuj imagas, ke oni antaŭe uzis *ci* en Esperanto, kaj ke tiu uzo poste malaperis, sed fakte *ci* neniam vere estis praktike uzata. Ĝi nur aperis ifoje en eksperimenta lingvaĵo k. s. **En normala Esperanto oni ĉiam uzadis nur *vi*.**

Kelkfoje oni trovas *ci* en tradukoj, kie la originalo havas *ci*-similan pronomon. Tio plej ofte estas netaŭga tradukomaniero, ĉar *ci* apenaŭ kapablas redoni la sencon de ofte uzata normala vorto, kiam ĝi mem estas maloftega preskaŭ sensenca vorto. Por montri ekz. nuancon de familiareco aŭ unsultan sencon, oni uzu je bezono aliajn lingvajn remedojn:

- *“Jes, jes!” diris la reĝo, “tunde **ci ricevos** nian filinon!” ĉar nun, kiel al estonta bofilo, li parolis al li “ci”.* En la originala teksto aperis *ci*-simila pronomo, kiu montris intiman, familiaran rilaton. Oni povus alternative traduki ekz. jene: *“Jes, jes!” diris la reĝo, “tunde, **kara filo, vi ricevos** nian filinon!”*, ĉar nun, kiel estontan bofilon, li nomis lin “filo”.

Tre multaj Esperantistoj ne komprenas la pronomon *ci*. Tial tiuj, kiuj provas uzi *ci* en interparolado, renkontas multajn malfacilaĵojn. En normala Esperanto oni simple uzas ĉiam *vi*, ĉu oni parolas al unu persono, ĉu al pluraj, ĉu oni parolas al intime konata persono, ĉu al fremdulo, ĉu oni parolas al amiko, ĉu al malamiko. Tio funkcias tre bone. **Je bezono oni povas pliprecigi per *vi sinjoro, vi amiko, vi kara, vi ĉiuj, vi amikoj, vi karaj, vi ambaŭ* k.t.p.**

[Bertilo Wennergren, Plena Manlibro de Esperanta Gramatiko. Esperanto-Ligo por Norda Ameriko, El Cerrito, Kalifornio, 2005, pp.102-103]

Wennergren 氏は英語国民であり、CI の存在はまったく無用である、と見ている。親近感を表すことなど全く不可能だと氏は言う。CI はかつて実用に使われたことがない、とさえ主張する。氏によれば、翻訳の際にも CI を用いることは不適切である。親しみを表現したかったら、CI のかわりに、「kara ..., vi」とか、「Vi amiko」とでもすればいい、と氏は勧める。この助言は参考にはなるが、古典の翻訳はできるだけ原文に忠実でありたいもの

である。

スラブ語圏の人なら、CI の必要性を訴えそうなものだが、そうでもない。チェコで出た文法書では次のようになっている。

La personalo CI neniam estis destinita por ĝenerala uzo, nur por literaturo (precipe por traduki verkojn, en kiuj la ci-dirado rolas specialan taskon). **En la komencaj jaroj de la movado oni provis ĝin en la ampozio aŭ en prozo por alparolado de infanoj kaj bestoj, sed montriĝis, ke la pronomo, ne uzata en la ĉiutaga vivo, malhavas emocian forton, kiun tiaj verkoj bezonas. Tial ankaŭ en la literaturo venkis VI inter geamantoj, ĉe infanoj kaj eĉ ĉe bestoj, same kiel en la komunuza lingvo; necesas nur atenti la nombron: *vi estas prava* (al unu persono), *vi estas pravaj* (al pluraj personoj).** En la literaturo kelkaj aŭtoroj ankoraŭ uzas CI de tempo al tempo, ekzemple por emfazi insulton (*ci kanajlo!*). Konsiderinde ofte estas uzataj la verboj *cii* (ci-diri) kaj *vii* (vi-diri). [Miroslav Malovec, Gramatiko de Esperanto. Kava-Pech, Prago, 2000, p.48]

エスペラント語誕生の初期には、私が要求するような親近感を表現する CI の使用が試みられたが、廃れてしまった、と Malovec 氏は記す。氏の指摘で興味深いのは「子供や動物への話しかけ」に CI の使用が試みられていた、ということである。つまり、子供や動物との関係は、初原的な天真爛漫なる関係、自分と他者とが自然に癒着している関係である。ところが、恋人や夫婦は愛情関係の最高段階である。つまり、他者との関係において初原と最高段階での結合に CI が用いられ、個人個人が分離独立した存在としての関係を表現するのに VI が使用されるのである。「我と汝」、「我と他我」、「我と他者」、「我と異人」等々の哲学的、社会学的、文学的概念は親密度を表現する CI を媒介としてより深く理解できるはずである。ただし、エスペラント語ではそのような使用の区別は消滅してしまった。

しかしながら、世界語には諸地域の国文学の翻訳という重要な役割がある。その際に、欧州諸国の文学での重要な二人称単数表現(Tu, Du, Ты)が CI で置き換えられなくなると、他にまた考案しなければならない。それよりも、各国で自国の文学の特殊性を考慮して、CI の意味の拡大を図ってはどうか？チェーホフ作品のように、いちいち注付けで処理しては、面倒だし、読書の流れを断ち切るという負の影響を及ぼす。地球上の諸地域の特殊性を考慮することは、世界語の思想と矛盾するように見えるかもしれない。しかし、文法的に正しいならばいかなる表現も許容されることがエスペラント語の長所である。諸地域の国語の翻訳においては、地域の特殊性を反映する語法が使用されてしかるべきである。理論的に存在可能であれば CI はもとより CIN と CIA も使用されていていい、と私は思う。一步譲歩して、これから生まれるエスペラント文学においては、CI の代わりに VI で済ますのもいいだろう。しかし、諸地域には蓄積された「古典」がある。その古典がエスペラント語に翻訳不可能となると、その害の方が大きい。